

審査の結果の要旨

氏名： 武居 寛史

本論文は、広く社会に見られ、かつ政治的決定において重要な役割を果たす協力規範と公平規範を対象に、政治学における新しい方法である行動実験とシミュレーションを用いて、協力や公平の希求がいかなる状況で観察され、社会的相互作用や決定にいかなる影響や効果を持つのかという問題に取り組むものである。それによって、政治的制度や行動の根幹にある、人間間の協力行動の発展や展開ならびに公平への志向性を明らかにしようとする。

本論文の構成は以下の通りである。まず第1章では、政治学、社会科学において、協力・公平規範が重要な概念であると同時に、囚人のジレンマや最後通牒ゲームといったモデルが、協力の達成や公平性の実現が自明でないことを示してきたために、多くの研究者の関心を集めてきたことを確認する。その上で、社会的選好の概念を導入し、社会的選好が両規範の根幹にあり、協力・公平性の達成に重要な役割を果たすこと、そしてそれが、社会科学の実験のみならず、広く生物学の分野においても関心と呼び、進化生物学、社会的行動を対象とした神経科学などが発展しつつあることを論じる。

第2章以降が、具体的な研究である。第2章と第3章では、協力規範に関係する研究を報告する。第2章では、スタグハントゲームを用いて、協力行動とコミュニケーションに関する行動実験の結果を報告する。社会的選好を前提とする場合、協力的な結果も均衡の1つであるが、非協力的な結果もまた均衡となりうるため、社会で協力が広まるか否かは、より好ましい均衡を実現できるかという問題となる。このとき、相互に、相手が協力するということを信頼すれば、協力的な結果が均衡となり、そのための有力な手段の1つが、コミュニケーションである。コミュニケーションについては、意思疎通が許されないというゲーム理論の前提が非現実的であるという観点から、多くの行動実験で、その効果が検討され、政治学でも研究成果がある。こうした先行研究とは異なり、第2章では、コミュニケーションがとられるという事実そのものが、協力を促すメカニズムと可能性を検討するため、コミュニケーションがとられたという事実だけが伝わり、メッセージの内容が伝わらない条件を設ける実験設計を用いた。協力・非協力どちらの均衡が実現するかを解明するスタグハントゲームと、それを多人数に拡張した最小努力ゲームを用い実験を行ったが、いずれも、内容が伝わらなくとも、コミュニケーションをとる機会が存在することが協力を促す結果となった。

第3章は、パートナー選択と協力の進化に関する進化シミュレーションを用い、社会的影響の過程、とくにその方向の分析を行った。政治学や社会学では、集団に属する個人間

の相互の影響は、政治的態度の研究における重要課題であった。特に模倣を想定したとき、誰が、誰に影響を与えるかという社会的影響過程のありようは、協力・非協力という結果に大きな影響を与える可能性が考えられる。進化シミュレーションにおける社会的影響は、具体的には、誰が、誰の戦略を模倣するかにより分析され、先行研究では、模倣を想定する以上、社会的影響過程が存在することを仮定していたが、その具体的メカニズム自体は、関心の対象外であった。本稿の研究は、その、あまり関心が払われていなかった影響過程を3つの異なるモデルで区別し、先行研究で主に用いられてきたモデルが、協力個体が影響力を持ちやすく協力規範の発生を助ける方向にバイアスがかかったものであったことを指摘する。その上で、協力か非協力かの戦略更新が、どの社会的影響過程を前提とするかに左右され、さらに協力・非協力のいずれの均衡に至るかを決定することを示す。

第4章から第6章では、公平規範に関する研究結果を報告する。第4章では、分配の公平性にかかわる実験の結果を報告する。第4章の実験の枠組は、ロールズの「無知のベール」に基づくものである。無知のベールは、広く知られている通り、個人の能力、地位といった情報が秘匿される場合、個人は平等を支持するか、社会に平等が実現するかに関わる議論であり、公平性を議論する際の中核的概念として、政治学を含め社会科学全体に影響を与えた。無知のベールに基づく議論は、純粋な利己性からも説明可能であり、経済学者は、無知のベールの下での公平な選択を、マクシミン基準という意思決定ルールとして理解した。この理解では、個人が「自分の」最悪の状況を改善する目的で選択をしており、「リスク回避」が重要である。しかし、社会的選好の観点からは、決定が生じさせる、社会の中の資源の不平等性、すなわち公平性の確保も問題となり、これはロールズの立場と合致する。第4章では、福祉国家における高・中・低所得層間の所得の再分配の決定を実験の枠組の中に取り入れ、無知のベールの下での分配の平等の選択は、リスク回避やリスク志向の問題（たとえば個人によるくじ引き）に帰着させることができるのか問うことである。実験結果は、公平性への選好の役割を示唆するものであった。

第5章と第6章では、公平性にかかわる進化シミュレーションを行う。資源分配がかかわる政治現象の理解においては、公平性の感覚そのものの理解を深めることも重要であろう。公平性の進化の議論の適用対象を拡大させることにより、社会内での相互作用のありようが、進化する規範に影響することを議論する。

第5章では、「貢献原理」に関する進化シミュレーションを実施する。先行研究で注目されてきた公平性は、結果の平等という意味での公平性に限定されてきた。しかし、社会で観察される公平性は多様である。例えば、一方的に貧困者を援助する政策には反対する人でも、互いの貢献に基づく社会保険による援助には、賛成する可能性がある。このような態度は、一定の貢献をした人が、支援されるに値するという、公平性の感覚によって説明が可能であるが、結果の平等のみに注目しては、説明できないものである。この章では、ナッシュの要求ゲームを用いて、相互作用の相手を選択できる場合とできない場合という、社会環境の違いが、多様な分配規範の出現を説明することを示す。本章の特徴は、

先行研究と異なり、分配する資源に対する貢献度を導入したため、考えられる公平規範は、結果の平等の意味での公平性だけに限定されないことである。シミュレーションの結果は、パートナーを選択できない状況では、貢献度が影響せず、平等な結果が実現することを示した。これに対し、パートナー選択が可能な状況では、貢献度に応じた分配結果（貢献原理）が出現した。

第 6 章では、「集団」での公平規範の進化について議論する。公平性についての研究は、最後通牒ゲームのように、相手が交渉で提案の拒否など一定の力を持っていることを前提とする 2 者間の関係性を扱うことが多かった。しかし、再分配政策の支持における公平規範は、当然 2 者間関係のように交渉の決裂を恐れることに由来するものではない。この意味で、特に交渉力を持たない人間を含む形での、集団レベルの公平性というのは、個人間ではなく、社会内での公平性を人がどのように考えるかを理解する際に重要になるはずである。社会的選好の理論も、2 者間の状況を限られたものではなく、集団に適用可能なものであり、その発生を理解する必要がある。本稿では、集団の公平性について、3 人最後通牒ゲームを導入して議論する。3 人と 2 人での質的な大きな違いとして、3 人の場合は、2 人の連合の可能性（「ひいき」）が生じる結果、分配結果が公平か否かだけに結果が限定されないことを挙げることができる。第 6 章では、パートナー変更の機会の有無という環境の違いに、社会ネットワークを取り入れており、パートナー変更は、誰とネットワーク上でつながりを持つかを変更することを意味している。シミュレーションの結果、パートナー変更がある場合は公平規範が広まるのに対し、パートナー変更がない場合は、ひいきが進化の結果となった。

第 7 章は、簡単な結論を述べるとともに、今後の研究の展望について議論している。

以上が本論文の要旨である。本論文の長所としては、特に次の三点を挙げることができる。

第一に、政治においてはもとより、社会における行動、さらには人間の本質に深く関わる、協力や公平に関わる規範の問題を、実験やシミュレーションなどの新しい方法を用いて、政治学の立場から、実証的に解明すべく取り組んだことである。たとえば、公平規範に関わる「無知のベール」に関しては、マクシミン基準によるリスク下の決定の観点から平等の選択を説明するゲーム論的立場と、公平と正義の実現という社会契約の観点から平等の実現を支持するロールズら政治理論の立場が併存する一方、行動経済学においては、二者ゲームや第三者判断による実験しか行われておらず、現実的含意を持つ実証研究はいまだ行われていない。本論文は、現実の福祉国家における所得の再分配に即したゲームを設計し、実験を行うことで、その結果が現実の社会における平等の支持にも有用な含意を持つことを示した。協力規範に関しても「内容が伝わらない場合でもコミュニケーションを行うことが相互の協力を促すか」という斬新な問題設定により、既存研究とは異なる実証的含意を引き出すことに成功した。

第二に、実験という、政治学のみならず社会科学一般でも、いまだに新しい手法に挑戦したことである。参加者にどのようなゲームやタスクを行わせるかという実験の理論的設計に加え、実験研究においては、参加者が相互に決定にたずさわって結果を出しデータを得るために、複雑なプログラムを書き、さらに、それをネットワーク上で実行する必要がある。社会科学において、最も実験研究が進んでいる経済学や心理学においても、こうした相互作用を伴う実験は大学の研究者にとっても、新しい課題である。本論文では、大学院生でありながら、独学で、既存研究における2者ゲームに対し、複雑な3者以上が参加するゲームをプログラミングして有意な結果を得ており、これは筆者の卓越した研究遂行能力を示すものである。

第三に、本論文は政治学における最先端と言って良い生物学との境界分野にも取り組んでいる。社会的選好を軸に、人間の協力行動や公平性の支持を考えることは、現在、社会的行動を分析する脳神経科学研究の最重要関心の一つであるが、本論文は、これに則り、社会科学では別々に分析されてきた協力規範と公平規範を統一した観点から捉えようとしている。さらに、政治学では、殆ど行われていない進化シミュレーションの手法を駆使し、両規範の理解を深めることに取り組んだことである。

もっとも、本論文にも短所がないわけではない。

第一に、社会的選好という概念から、協力規範と公平規範を結びつけ、統一的な分析枠組を最初に提示した一方、個々の実験やシミュレーションが、この統一的な枠組とどのように関係するかに関しては、必ずしも明示的かつ説得的に論じていない。これは、政治学者を含め、多くの読者が、社会的選好やゲーム理論、さらには実験やシミュレーションに関して専門的知識を持たないことを考えれば、本論文の価値を伝えるのに大きな障害となる。

第二に、実験やシミュレーションが、現実の人間の行動や社会においてどのような含意を持つかに関しては、問題の設定においても結果の解釈においても、説得的な議論が行われているとは言い難い。特に、実験やシミュレーションなどの新たな手法が、政治学の実証研究との関係でどのように位置づけられるかは、本書の引き出した結論の評価には欠かせない議論であるが、この点において、論文の記述はいまだ十分とは言えない。

しかしながら、これらは、筆者が、新しい分野に果敢に挑戦した結果でもあり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士（法学）の学位を授与するにふさわしいと判定する。